水との思い出

横北小　五年二組　柳井　源輝

水は、ぼくが生まれた、何億年以上も前からあるものだ。だから、ぼくは、お母さんのおなかの中にいる時から、水と一緒に居た。きっと、前世でも水と一緒に生きていたろう。

しかし、水とのアクシデントにも、何度か見まわれた。池に落ちたり、川でおぼれたり、水を飲んでしまって、せきが止まらなかったり。そんなことがあっても、水のことをきらいになることなんて、一度もなかったのだ。

五才の時には、水でっぽうで遊んだり、公園のふん水で遊んだりした。六才になると、どろだんごをつくるのに使ったり、スイミングに通い始めると、水とふれあう機会がものすごくふえた。このことをきっかけに、ぼくは、水の事を考えることが多くなった。特に夏は、水遊びをよくするようになった。水風船を投げて遊んだり、水あびをしたりだ。小学生に

○ 句点・読点・かぎかっこなどは、一マスとること。
○ 段落は行をかえること。
○ 行の終わりに句読点がきたら、そこにつけること。段落のほかは次の行の始めの一マスをあけないこと。
○ 書き終えたら推敲すること、特に使ったことばが適切かどうかみなおすこと。

なると、水さい西をかいたり、プールで泳いだりと、水とふれ合う機会が、さらに多くなった。まさに、水は、親友のようなものだ。

二年生になっても、親友のことを考えたり、親友と生活したり、親友と行動するのは、あたりまえのように続いた。しかし、ぼくは、大事なことに気付いた。水は、自分の周りにあたりまえのようにあるようで、あたりまえではないのだ。水は、いつかなくなってしまうかもしれない。つまり、親友は永遠にいる

ようで、いつかはいなくなってしまうのだ。

それからは、節水に心がけた。それでも、親友とふれ合うことは続いていく。四年生になると、スイミングクラブや水泳のじゅ業の成果が、クロール、せ泳ぎ、平泳ぎ、バタフライの四泳法で合格することができた。そのとき、ぼくは、飛びはねてしまいそうなくらいに喜んだ。きっと、人生で一番親友のことを考えただろう。

自分でも、少し大げさに書いたかもしれな

○ 句点・読点・かぎかっこなどは、一マスとること。
○ 段落は行をかえること。
○ 行の終わりに句読点がきたら、そこにつけること。段落のほかは次の行の始めの一マスをあけないこと。
○ 書き終えたら推敲すること、特に使ったことばが適切かどうかみなおすこと。

No.　　No.

い。書きながらも、そう思った。しかし、水のことを一番考えたのは、スイミングのことと、作文を書いている、まさに「今」だということ。せっ対にこれは本当だ。

○ 句点・読点・かぎかっこなどは、一マスとること。
○ 段落は行をかえること。
○ 行の終わりに句読点がきたら、そこにつけること。段落のほかは次の行の始めの一マスをあけないこと。

○ 書き終えたら推敲すること、特に使ったことばが適切かどうかみなおすこと。